

ヒルティの「幸福論」を読む。

「世にはわれわれの力の及ぶものと、及ばないものがある。

われわれの力の及ぶものは、判断、努力、欲望、嫌悪などひと言でいえば、われわれの意志の所産の一切である。われわれの力の及ばないものは、われわれの肉体、財産、名誉、官職など、われわれの所為(せい)でない一切のものである。われわれの力の及ぶものは、その性質上、自由であり、禁止されることもなく、妨害されることもない。が、われわれの力の及ばないものは、無力で、隷属的で、妨害されやすく、他人の力の中にあるものである。

それゆえ、きみが本来隷属的なものを自由なものと思い、他人のものを自分のものとするならば、きみは障害に会い、悲哀と不安におちいり、ついには神を恨み、人をかこつことになるであろうことを忘れるな。これに反して、きみが真に自分の所有するものを自分のものと思い、他人のものを他人のものとするならば、誰もきみを強制したり、妨害したりしないでであろう。」

冒頭の引用は、スイスの法学者、哲学者、文筆家であるカール・ヒルティの「幸福論」からのものです。「幸福論」は数多くありますが、このヒルティの他に、アランことエミール＝オーギュスト・シャルティエと、バートランド・アーサー・ウィリアム・ラッセルのものが有名で、世に「三大幸福論」と呼ばれています。この三者の中では、ヒルティが1833年生まれと一番年長であり、読み比べると時代的な隔たりを最も感じますが、一方でこの本の中には、現代にも通じる「生きること」、「働くこと」のヒントが詰まっています。

さて、ヒルティは、この本の中でキリスト教精神に基づいた「意志」の重要性を説いているとされており、引用したこの箇所は、一面でその精神を象徴するものかもしれませんが、キリスト教精神の理解は十分ではありませんが、周囲を自分の思い通りすることなど到底できないことを、自明のこととして認識した上で、自分で努力できることや自分が対処すべきことと、そうでないことを理解し、それらをわきまえて生きていくことは、「自分らしく生きる」上で、とても重要であることをあらためて気付かせてくれます。

若者の「あの人のようになりたい」とか「あの人のように成功したい」と思う気持ちは、人格向上のためのモチベーションとして肯定的に捉えるべきことと思いますが、一方で、周囲を自分の思い通りにしようしたり、あるいは時に恨んだり、妬んだりするのは、他者はもちろん結局は自分をも傷つける行為に繋がります。ヒルティの言うように、自分の強みや特徴を活かしながら、与えられた仕事や役割を日々精一杯努めていくことが、「平穏な幸せ」に通じる一番の近道なのではないかと思います。

ちなみに、ショパン演奏で著名なポーランド出身のピアニスト、アルトゥール・ルービンシュタインは、「ほとんどの人々は、条件付きの幸せを求める。だが幸せは、条件を付けない時にしか感じられないものだ。」と述べています。かつてこの一節を引用し、音楽評論家の故吉田秀和が、こうしたルービンシュタインの自然体の生き方は、彼の銜(てら)いのないショパン演奏にも通じると語っていたことを思い出します。ピアノの演奏だけでなく、人生の達人でもあったルービンシュタインのようにはいきませんが、少しでも近づけたらと思っています。

(文中敬称略)

令和5(2023)年8月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡 明